高知県立大学　看護学部　学生生活通信　　2018年2月　第14号

fure-fure

高知県立大学　看護学部
Faculty of Nursing University of Kochi

U.K.
Faculty of Nursing
University of Kochi

各学年の大学生生活

■1回生■

1回生は、看護技術を習得するために様々な演習に取り組んでいます。写真はフィジカルアセスメントⅡの様子です。この科目では、対象者の健康状態を把握するために必要な、身体観察と評価のための知識と技術の習得を目指しています。演習では、全員が観察を実践しながら看護者役と患者役を体験し、より良い方法や観察結果の意味について考えます。その過程では、人体の構造や機能に関する知識など他の科目での学びが活かされます。「あ！そういうことだったのか」「あの時に勉強したことがここで使えるんだ！」と知識のつながりを実感できるようになり、学習意欲も高まっているようです。12月には、“大学生として学ぶ”ことの意味や方法について深く考える時間を持ちました。授業だけでなく日常生活の様々な場での経験が糧となり、将来の自分の看護につながっていくことを意識し、各自が自分なりの目標をもって日々成長しています。

■2回生■

12月22日に「飛躍これから始まる夢への道」というテーマでクリスマス会を開催しました。企画・準備・運営は、クリスマス委員が中心となり、2回生みんなで協力して学生・教員をもてなし、これから国家試験受験へと向かう4回生に向けてエールを送りました。

イメージキャラクターはジブリのキャラクターを選び、体育館やテーブルに飾りつけ、会場をにぎやかに演出しました。各学年はスタンツを披露して会を盛り上げる中、2回生は何度も事前練習を行った手話と歌を披露しました。クリスマス会の準備から、3回生と4回生の先輩からもらった助言を活かし、滞りなくクリスマス会を進行することができました。また、１回生とともに会場の片付けなどを行い、学年を越えて縦と横のつながりを実感する機会となりました。

■3回生■

3回生は、領域実習に取り組んでいます。領域実習は、2週間ごとに、精神・母性・小児・急性期・慢性期看護の領域を病院で、地域看護の領域を市型保健所で実習します。写真は、急性期看護実習に向けて事前学習をしている様子です。この実習では、手術を受ける患者さんに対し、手術後の回復に向けた看護を提供します。受け持ち患者さんの手術に立ち会える学生もいます。大きな手術をしても早く回復し退院する今の高度な医療についていくために、学生は、解剖、人体の生理学的機能、薬理ととても多くの知識を活用し患者さんの状態を理解します。そのため、学生は、自宅に戻った後も勉強します。このような経過を経て、2週間で学生は成長します。領域実習を全て終える2月には、さらに大きく成長することでしょう。

■4回生■

4回生は、最後の臨床実習である在宅看護実習、看護実践能力開発実習を終えました。また、それぞれの関心領域において、1年をかけて興味深い現象を探求してきた看護研究を論文としてまとめ、看護の現象を探求すること、さらに看護実践に寄与することの意味を学びました。

そして、2月には、看護師・保健師・助産師国家試験の受験を迎えます。受験に向けての準備、4年間の学びを整理し、学習を進めていくことで専門職者としての責任の重さを実感しながら受験勉強に取り組んでいます。

これからは、看護研究発表会、新生活への準備、卒業とそれぞれの新たなスタートに向けて着々と準備を進めていきます。自分の描いた未来に向かって期待をふくらませながら、大学生活は残りわずかですが、4回生全員で力を合わせて一つ一つ課題に取り組み、卒業を迎えたいと思います。

看護学部教務委員長　大川宣容先生

看護学部のカリキュラムは、ディプロマ・ポリシーに沿う能力を、学生の皆さんが修得できるように設計されています。教務委員会では、社会の変化に合わせて教育の質が確保できるように、カリキュラムの点検と整備に取り組んでいます。学生の皆さんが、夢の実現に向かって学びを深めていけるように、選択科目を充実させていることは本学のカリキュラムの特徴です。免許を取得するために必要な科目だけでなく、皆さんが将来活動したい方向性から必要な能力を向上するために、選択科目を履修していただきたいと考えています。

私は、大学での学びの時間は財産だと思います。これからの社会で生きていくためには、自ら主体的に学ぶ力がますます重要になります。

「皆さんは、これまでどんなふうに学んできましたか？」「これからどんなふうに学んでいきたいですか？」「皆さんが活躍していくためには、どんな力が必要だと思いますか？」

能力を獲得していくためには、皆さん自身が主体的に取り組むことが必要です。社会の変化に伴い現場の課題は複雑化しています。覚えたことをその通りに行うことでは太刀打ちできない課題にあふれています。答えのない課題を考え続けることは苦しいのですが、あきらめずに考え続けることで見えてくることもあります。学んだことを活用して課題解決に向けて、思考しながら取り組むこと、さらにより良くする方法を工夫していくことを通して、能力は向上していきます。皆さん自身が能力を高めていけるように、獲得できる能力を意識しながら学ぶことにより、生涯学習の基礎が形成されると考えます。

本学では、履修登録上限単位数（CAP）制度として、半期に履修できる上限単位数を定め、授業外の皆さんの学習時間を確保できるようにしています。ICTの活用にも力を入れ、英語だけでなく専門教育科目でもMoodleの活用を開始しました。また、グローバルな視点を学ぶことができるように、海外研修と連動する科目の設置なども検討しています。これらのことに取り組みながら、皆さん自身が生涯にわたり学び続けるための基盤を獲得できるように、支援していきたいと思います。

看護学部の活動－地域の専門職者育成の取り組み　森下幸子先生

全国的にも注目されている本学の「高知県中山間地域等訪問看護師育成講座」をご紹介いたします。本学は「県民大学」として、教員自らが高知県の地域課題を認識し、大学の教育・研究機能を活かした課題解決の方策を政策提言し、関係機関と共に対策に取り組んでいます。

全国的に在宅医療が推進されるなかで、中山間地域の多い高知県は訪問看護師の人材育成が難しく、訪問看護師数が少ないという課題を長年抱えていました。その課題に対して、平成27年、高知県から寄附を受け本講座が開設され、看護学部、健康栄養学部、社会福祉学部の教員と専任教員が訪問看護ステーションや関係機関と協働して、大学独自の「新任・新卒訪問看護師育成プログラム」の開発を行い、県内の訪問看護人材の育成に取り組んでいます。平成28年度からは看護教育機関を卒業したばかりの新卒訪問看護師の育成も開始し、現在、本プログラムの「訪問看護スタートアップ研修」の修了生は64名となり、多くが訪問看護師として活躍しています。

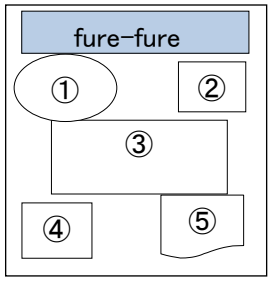
この数年、全国的に新卒訪問看護師育成への取り組みが進んでいますが、それまでは新卒者が訪問看護からキャリアを歩み始めることは稀でした。しかし、本プログラムによって、本学の卒業生を含む7名が新卒1年目から訪問看護ステーションに就職し、仕事をしながら一年間の研修を受け、1人前の訪問看護師を目指して学んでいます。

このような大学と地域が協働した地域の専門職育成への取り組みは、全国でも類をみないもので期待も高まっています。詳しくは大学HPで随時掲載しておりますので、是非ご覧いただけますと幸いです。

-本学の卒業生も受講中です-

-研修中の様子です-

表紙の写真



①1回生　クリスマス会
②3回生　領域看護実習事前学習
③4回生　クリスマス会
④1回生　学内演習
⑤2回生　クリスマス会

災害看護への取り組み

災害看護を学ぶ

【看護専門科目：災害と看護Ⅰ・Ⅱ】

自然災害大国の日本では、阪神淡路大震災をきっかけに災害看護に対する考え方が大きく転換し、「看護師として誰もが知るべき、基礎的な知識・技術の一つ」と考えられるようになりました。さらに、南海トラフ地震が想定されている高知では、支援者となる前に被災することが予測されるため、まずは自分たちが命を守れることが重要です。

そこで、本学の『災害と看護』では、ⅠとⅡに分け、Ⅰでは1・2回生を対象に「自分たちが被災者として命を守る」、Ⅱでは3・4回生を対象に「健康の支援者として命をつなぐ」を大きな目標として開講しています。

Ⅰは１回生と２回生のほぼ全員が一度は受講してくれますが、Ⅱは他の科目でも災害関連の講義があったり、立志社中活動が充実してきたせいか、受講者が減っていて残念です。発災後のリアルな状況設定をゲーム形式で意見交換したり、様々なジレンマへの対応、被災者の生活に寄り添う看護活動をめざして演習や意見交換を主に行なっていますので、3・4回生になってもぜひ受講していただきたいと思っています。また、国内外で救援活動を経験された先生や、現在も大学院共同災害看護学専攻博士課程（DNGL）の学生と共に海外の被災地支援に携わっている先生方の講義からは、国際救援の視点も学べます。

ぜひⅠとⅡ両方受講し、本学ならではの災害看護を学んでください。

【看護研究（4回生）：災害看護】

本年度の看護研究 災害看護グループは、避難所の睡眠環境を少しでも改善するために、段ボール箱を再利用した「囲い」を考案し、実験的にその効果を検証しました。実験は、体育館を避難所にみたて、考案した「囲い」の有無によって、どの程度騒音の聞こえ方が変化するか、騒音計による音の計測と、実験協力者の主観で回答してもらいました。騒音は、耳元を歩く人の「足音」とし、研究者が何度も実験協力者の耳元を往復してデータ収集を行いました。そしてついに、学生が考案した「囲い」は騒音を減衰させる効果があることが立証されました。

学生は、災害や避難所にとどまらず、人の睡眠と環境の影響をナイチンゲールから読み解き、夏休みを返上して実験に臨みました。試行錯誤の末考案した「囲い」の効果を、科学的に立証する過程も学ぶことができました。研究成果は今後、学会誌等で公表予定です。

－研究協力者へのオリエンテーション－

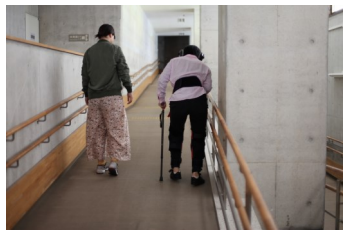
－主観評価 回答中－

災害に備える－合同災害訓練

平成29年11月5日（日）、高知県立大学は隣接する高知医療センターと合同災害訓練を実施しました。災害発生時、本学池キャンパスでは、軽症の受傷者と避難者の受け入れを行うことになっています。この訓練は、発災時に大学にいると想定される学生、教職員が、まず自分の安全を確保し避難する訓練と、災害時に高知医療センターと本学が地域において、その機能が果たせるよう行っているものです。

訓練当日は、学生、教職員が、避難するところから開始されました。発災を知らせる放送があると、学生は窓から離れて、身近にある身を守れる物の下に隠れ、真剣に訓練に取り組んでいました。揺れがおさまった後には、学内の高い場所に避難し、教職員に点呼を受け、はきはきと自分たちの状況を伝える様子が見られました。それぞれが災害を身近に感じながら、訓練に取んでいました。また、この訓練では、発災後6時間経過し、高知医療センターに来院した軽症者、帰宅困難となり避難してきた地域住民を、本学と高知医療センターが受け入れるという訓練も行われました。あらかじめ設定された軽症者役を担う学生さんは、災害時に医療者からの治療や看護を受ける経験をしました。「立志社中」のチームである「健援隊」は軽症者受け入れチームを支援、「いけいけサロン活動」は地域住民の方の避難所生活体験を企画・運営、「イケあい地域災害ボランティアセンター」はボランティアセンターの立ち上げ・運営に取り組みました。また、学生サークル「B-HERO」は、学生の訓練参加への支援や訓練の様子について記録等を行いました。さらに2回生の1グループは、この訓練で地域学実習Ⅱに取り組み、妊婦さんや高齢者の立場にたって避難を体験し課題発見から解決する方法を検討しました。

『初めてトリアージタッグを見ることができたし、思った以上に設定がきちんとしていて驚きがあった』という感想もあり、安全を守る避難訓練と同時に、それぞれの学生が自分たちの関心ごとに応じた学びを得ることができました。



－地域学実習Ⅱに取り組む学生さんの様子－

－学生が企画した避難所生活体験の様子－

〔ニュースレターの名前の意味〕fure-fure 学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。 fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp